



働くうえで必要な力を、仲間と共に自ら獲得し 変化を起こしながらより良い未来を切り拓く人に

特別支援学校流山高等学園（千葉県立）



左から、研究主任の古江陽子先生、生活技術科主任の豊岡優子先生、領域「私の時間」主任の磯村友希子先生

高い就業実績を誇る学校に
まだ足りないものは何か

特別支援学校流山高等学園は、2020年に文部科学省の研究開発校の指定を受け、目下「特別支援教育における、変化する社会で生き抜くための資質・能力とエージェンシーを育成する教育課程及び指導方法の研究開発」に取り組んでいる学校だ。

もともと同校は、以前から就業実績に定評があった。開校以来の平均就職率は9割以上。職業に関する専門学科が4つあり、専門教科の授業では、仕事を想定した実習を日々行っている。1年次から企業等の現場実習も体験。3年次には本人の希望や特性を踏まえて

「就職を見据えた実習先」につなぎ、現場実習を繰り返し返す。そのうえで、最終的には生徒と実習先の互いの意思を確認し、就職を決める。こうした丁寧な指導で、就労へのスムーズな移行を支援してきたのだ。ところが、2017年に卒業生の就労3年目の状

況を調査すると、見過ごせない問題が浮上する。

「離職者が約2割、離職まではいかなものの、就労に困難を抱えている人が約2割いました。キャリアアップの前の大きな離職は一部。卒業生の4割近くが、就労面で課題を抱えていたのです」（研究主任・古江陽子先生）

その課題とはいったい何なのか。学校でどんな教育をすれば、生徒がその壁を乗り越えられるのか。古江先生たちは課題を分析し、これからの教育のあり方を模索したという。

離職の要因を分析するなかで
より良い未来に向かう力に注目

離職や離職危機の要因を分析していくと、意外なことが見えてきた。

同校では生徒の現場実習時に、実習評価表を用いて「挨拶」「報告・連絡」「作業の正確性・スピード」「協調性」などを評価している。職場の作業で求められる力であり、就職時にも重視される力。しかし離職者の大半は、実はその作業能力とは違う要因でつまづいていたのだ。具体的には「親子関係」「友達・異性関係」「雇用条件」「健康面」

「感情のコントロール」などで、その問題が結果的に就労意欲の低下に関係していた。

この分析を基に、同校研究部は新たな調査を行う。企業・卒業生・在校生・教員にアンケートを実施し、働くうえで大切だと思うことを、実習評価表にない項目も加えて質問した。そしてその結果も踏まえ、全職員で、学校で育成する資質・能力を5つの分野に整理した（図1参照）。

今までの方針との最大の違いは、「作業」に必要な力と、「社会生活」に必要な力をあえて別にし、その両方を育成するとしたことだ（なお、一つ目の「作業能力」は、報告・相談、反省・改善など作業上のコミュニケーションや自己実現の力も含んでおり、総合的な働く力と言える）。

「働いていくには、就労に関する力に加え、人と関わる力や、自分自身を見つめる力も必要だ」という認識になったのです（古江先生）

まとめて表せば、「身体的・精神的・社会的にも充実したより良い未来（Well-being）に向かうための力」の育成が、同校の目標になった。

図1 より良い未来に向かうための資質・能力

作業	作業能力 はたらく	挨拶、報告・相談、反省・改善、協力・協同作業など21項目
	コミュニケーション力 かかわる	日常生活の挨拶、反省・お礼など
社会生活	生活力 くらす	読み書き、数量を扱う力など
	自己実現力 ぎめる	受け入れる力、将来を考える力など
	自己調整力 ととのえる	自己理解、感情のコントロールなど

計20項目

資質・能力のルーブリックを作成
生徒用にさらにカード化

では、その資質・能力の5つの分野を、どのような指導で育むのか。 「これまでの指導は、教員のほうが」あなたにはこういう力が必要だからこう

図3 ステカ(ステージアップカード)の活用



ステカ・パソコン版。画面上で「報告・相談」など各項目について今までの段階が4枚のカードから選択。全項目を選ぶと、自己評価・他者評価をマトリクス表で俯瞰できる。表の見方がわからなくても、下の画像の提示で、生徒が「強み」「課題」「強みかも」「課題かも」をつかめるようにしている。

図2 より良い未来に向かって働きかけるための活動サイクル



「見直し」では、今の自分を分析し、目指したい未来の自分もイメージ。「実践」では、なりたい自分に向かう作戦(課題解決)を実行。「振り返り」では、自己評価や他者評価を基に、理想に近づけたか、作戦は良かったかを検証。この一連の活動を、仲間や教員と相談しながら進める。

しよう」と促し、生徒がそれに従う部分があったように思います。ですが、変化が激しい社会を豊かに生きるには、生徒がより主体的に将来を見つめ、どのような力をつけるかも自分で選択・決定していくことが大切ではないかと感じていました(古江先生)

そこで着目したのがエージェンシーという概念だ。「変化を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」のことを言う。このエージェンシーを生徒が発揮すれば、教員主導でなく、生徒が自分でより良い未来に向かえるのではないかと。古江先生たちは、授業実践と検証を重ねて、生徒が「見直し」「実践」「振り返り」の活動を回していく学習プロセスを整えた(図2参照)。

並行して、ツールの開発にも注力する。何のためのツールか。資質・能力のことを生徒が理解し、「私はこの力をこのレベルまで高めたい」と自分で方向づけできるようにするためのものだ。2018年から2年間かけて、次の3つのツールを順次完成させた。

①自立へのステージアップ表

資質・能力の5分野について、41の小項目を設定。各項目の目指す到達点を4段階で示した表を作成した(いわゆるルーブリック、欄外参照)。

②ステカ(ステージアップカード)

ルーブリックの内容を、平易な言葉とイラストで表し、トレーディングカードふうの教材にした。ハガキ大のサイズ

で、合計164枚。生徒はこのカードを並べながら、「挨拶」「継続力」「健康管理」などの資質・能力の小項目について、今の自分はこの段階で、いつまでにどの段階まで高めたいかを考えられるようになった。

③ステカ・パソコン版

パソコンの画面上でも、カードを選んで自己評価できるようにした。また、その自己評価と、教員による他者評価を比べながら、全体を俯瞰できるようにした(図3参照)。

「私の時間を創設、仲間と一緒に今の自分、なりたい自分を考える」

2021年からは、すべての教育活動を関連づけて、カリキュラム全体で資質・能力を伸ばすことにも取り組んでいる。領域「私の時間」という年間35時間程度の枠を創設。この時間を軸に、生徒がステカを使い、今の自分、なりたい自分、その未来に向かうための作戦を考案し、思い描いたことを学校生活全般で実践するようにしたのだ(図4参照)。

領域「私の時間」主任の磯村友希子

先生は、この一連の活動で、「仲間と相談し、一緒に考える」ことを重視してきたという。自己評価のときも、未来に向かう作戦を立てるときも、一人で考える時間とは別に、生徒同士の対話の時間を必ず入れた。

「一緒に考えると、自分とは違う意見があることに生徒が気づきます。他人

の意見を取り入れるとできることが広がることや、相手に意見して力になれると嬉しいことも味わいます。いろいろな意見から「最終的には自分で選ぶ」という自己決定も行います。自分だけで考えず、人との関わりのおかげで課題を解決できるようになってほしいのです(磯村先生)

ある話し好きの生徒は、人に話を聞いてもらえないとイラッとする自分に課題を感じていた。だからステカにあった「ストレスマネジメント」を高めようと、苛立つたら一人になって気持ちを静める作戦を実行した。でも仲間と考えるうちに、別の作戦も見つかったという。話を聞いてもらえないのは自分の接し方にも問題があったと気づき、ステカにあった「返事」の力に着目、人に注意されたときに返事をする作戦も加えた。働くことや生活することへの向き合い方が、一人でがんばるものから、みんなで課題を乗り越えるものに変化したのを感じさせる出来事だった。

自分の弱みの克服を楽しんだりその弱みを受け入れたりする

生徒たちは専門教科の授業でもステカを活用している。例えば生活技術科の生徒は、糸を織り、できた布地を裁断・縫製して布製品を作り、文化祭で販売することに取り組むのだが、その際に自分が高めた力を、単元ごとにステカを使って選ぶのだ。「作業の正確性」「継続力」などがあり、なりたい

生徒INTERVIEW

友達がいっぱいできるこの学校で
まだ改善できる部分を伸ばしたい

専門実習では、織り機で糸を紡ぎ、布を織ることをしています。最初は難しかったですが、ステカにある「作業のスピード」も今は上がり、「継続力」もつきました。今ががんばっているのは「報告と相談」。私は記憶するのが苦手なので、報告のためにメモを取っています。メモの取り方は、相談会で先輩に教わりました。

この学校の好きなどころは、友達がいっぱいできて、先生方や先輩方も優しいところ。みんなからの他者評価では、私には作業面でまだ足りないところがあるので、これからも改善していきたいと思っています。力をつけて、親にも感謝の気持ちを込めて何か贈ったり、親孝行もできるようになりたいです(原田さん)。

目標を立てて達成することや
みんなで考えることを楽しみたい

製品作りのなかで、生地を一つひとつ組み合わせ、ミシンで縫うことをしています。ステカにある「安全管理」を大事にすることで、針を折ることや、指を怪我することはなくなったので、今は「反省と改善」に取り組んでいます。ミスがあったら行動を振り返り、改善点を見つけ、次に生かすんです。初めてミスなく製品を作れたときは「やればできる!」と嬉しくなりました。

将来もミシンの仕事がしたいです。あと、一人暮らしもしたい(笑)。社会に出て一人でやっていけるかは、まだ不安です。でも、生産量のことをみんなで協力して考えたり、声をかけ合って作業するのは好きなので、そんなふうがなればうれしいなと思います(村井さん)。



左から、生活技術科2年生の村井 光さん、1年生の原田知佳さん

あなたが何のために働き、どんな未来に向かいたいのか。そのことを、借りの言葉ではなく「自分の言葉で書くようになった」ところに、磯村先生は生徒の成長を感じている。

活動を通して先生たちが実感したこともある。未来に向かって「生徒が考える」ところ、その構想をもって「人と関わる・実践する」ところの掛け合わせが大事である、ということだ。

「ステカを使えば今の自分や、なりたてはまだまだふわっとしたものだ。そこから仲間や教員との対話で気づきを得たり、実習で自分の強みや弱みについて納得したり、卒業生や先輩と話すなかで憧れを抱いたり、実体験の蓄積があったら、初めて、ストンと腑に落ちる今の自分、なりたての自分ができてくるんです」(古江先生)

すると、なりたての自分の描き方も変わるという。最初はステカや資料を参考に「何々したい」「何々したい」とブツ切りの言葉を並べていたのに、次第に「何々をしたいから、こんなことをやって、こうしたい」と、言葉が有機的に結びついていくのだ。

図4 流山高等学園のカリキュラム・マネジメント



左側の「私の時間」では、ステカを活用したり卒業生の講話を聴いたりして、作業面から生活面まで幅広い今と未来を想定。理想の未来に向かう作戦も考える。そのうえで、右側の学校生活全般で作戦を実行し、SHRなどで振り返る。さらに左側の「私の時間」で要所の振り返りも実施。このほか、園芸や福祉などの専門教科の授業でも、ステカを活用し、主に作業面について、見通しを立て、実践し、振り返ることをしている。

自分のレベルも設定したうえで、そこに向かうための作戦も考え、日々の授業で実践。授業の終わりに○か△かで自己評価し、週ごとや単元ごとの振り返りも行う。

同授業を受けもつ豊岡優子先生は、「対話すること」と「やってみることを」大切にしてきたという。

「生徒が目標や作戦を立てるとき、最初は介入しませんが、悩んでいたら話しかけます。話を聴くと生徒の思いが出てくるので『いいね、それを書こうよ』と促すのです。何もしないうちから『できない』と思いつくこともあるので、『まずはやってみよう』とも促します。やってみてどうなるか感じて、難しいことがあれば、そこをまた一緒に考えよう、と」

生徒の成長も感じている。気づけば、まだ評価が低いステカの項目を、生徒が自分で探すようになった。そこで目標を設定し、作戦を立て、改善すれば、未来は変えることができ、達成感も味わえることを知ったからだ。

もちろん人にはそれぞれの特性があり、克服しづらい弱みもある。だから3年生の終盤では、領域「私の時間」で、社会に出たら自分の弱みにどう対応するかを、強みの生かし方と合わせて考える。弱みの克服を目指してもいいし、その弱みを受け入れ、「あらかじめ周囲に説明する」「周囲に助けを求めろ」といった代替案を考えてもいい。何を選択するかは本人次第。でもこの作戦も仲間と一緒に考える。弱みもある自分のことを「友達が受け入れてくれた」「相談にも乗ってくれた」ことで、気

持ちが楽になる生徒も多いという。

生徒が自分で見つけた
「働く」や「未来」を目指していく

活動を通して先生たちが実感したこともある。未来に向かって「生徒が考える」ところ、その構想をもって「人と関わる・実践する」ところの掛け合わせが大事である、ということだ。

「ステカを使えば今の自分や、なりたてはまだまだふわっとしたものだ。そこから仲間や教員との対話で気づきを得たり、実習で自分の強みや弱みについて納得したり、卒業生や先輩と話すなかで憧れを抱いたり、実体験の蓄積があったら、初めて、ストンと腑に落ちる今の自分、なりたての自分ができてくるんです」(古江先生)